

高澤組その2

2023. 9. 10

都合がつかず参加できなかった人とは、ラインカメラや電話で話をした。ビデオメッセージもあった。そこには、中学時代の私からの一言が、その後の人生に影響を及ぼしていることが語られていた。中には、これからステージに向かおうというプロのダンサーもいた。きっと、中学校と高校の部活動での経験が、今の彼女を支えていると思った。

最初の代や次の代のメンバーが、後輩たちが東北大会や全国大会に出るようになってうれしいという話をしてくれた。私からは、あなた方ががんばりがあったからこそ、その後の後輩たちの活躍があったんですよという話をした。実際にそうなのである。

ある人と話した。試合で勝つことを目標にはしていたが、本当のねらいは、人間形成を目指していたという話をした。すると、「先生、それはわかっていましたよ」と返ってきた。何だかうれしかった。

ある人はこんなことを聞いてきた。「先生は、なんであのかとき自分を部長にしたんですか。〇〇か〇〇だと思っていました」「確かにテニスがうまかったのは〇〇だったなあ。人間性であなたにしたと思うよ」その人は涙ぐんでいた。

森合のテニスコートから夜の会まで、ずっと写真を撮ってくれている人がいた。映像の仕事をしているとのことだった。わずか3か月の最初の代の生徒である。後日、200枚を超える画像が送られてきた。そこには、歳のわりには動いている私が写っていた。ありがたい。いい記念になる。

会の最初に、W君からあいさつがあった。私が、今年度で60を迎え、退職するという事で集まってくれたそうだった。感激である。60という年齢はそういうことなのかと初めて意識することとなった。

私のあいさつもあった。「この会の名前が、あの辛かった日々を1日だけ思い出そうの会となっていますが、間違っていると思います。あの楽しかった日々だと思えます」全くうけなかった。たくさんのお教え子たちといろいろな話をした。やっぱり部活動はいい。

企画してくれたW君は、サプライズを仕組んでくれたのである。心憎い演出である。W君の担任は、3年間私である。部活動の顧問も3年間私である。いいのかわるいのか。W君のラインには、「忙しい毎日ですが、これまでの人生の中で、今が一番楽しく充実していると感じています」とあった。教え子たちが、元気でいてくれること、それだけでうれしいものである。

思いがけず、よい機会に恵まれた。すべては教え子たちのおかげである。どうしてこんなにいい人たちがそろっていたのだろう。今は、そう思う。私は、ずいぶんと恵まれていたようである。高澤組のみなさん、ありがとうございました。また、集まりましょう。